

あかるさかおるの スケッチブック

No. 10

バックナンバーは、町ホームページで
まとめて読むことができます▶



“千と千尋とホントの私”

最近母になった友人が、面白いことを言うのです。妊娠してからというものの「千と千尋の神隠し」の千になったみたいだと。母子手帳を交付してもらいに行っても、検診でも「ママは体調どうですか?」「ママのお仕事は?」。本名の書いてある書類が目前にあるのに、「ママと呼ばれる!」と。

ジブリ映画「千と千尋の神隠し」では、異世界に迷い込んだ千尋が、魔女^{ゆばば}の湯婆婆に「千尋というのかい? 贅沢^{ぜいたく}な名だね。今からお前の名前は千だ。」と名前を取り上げられてしまいます。本当の名を忘れてしまえば、自分が何者かもわからなくなり、元の世界に戻ることも叶いません。湯婆婆は名前を奪うことで相手を支配するのです。

名前は、自分のアイデンティティの核となるかけがえのないもの。親の願い、今まで培ってきた能力、育んできた夢、大切な思い出…自分を作る

全てが、そこには宿っています。

一方で、ほとんどの女性は結婚すると名字が変わり、そして子供ができると、家族だけでなく世間からもママと呼ばれるようになります。それは幸せであると同時に、自分らしさを手放すような、私が私でなくなっていく感覚…。

もちろん妊娠・出産は尊いし、我が子は本当に可愛い。それでも多くの女性が不安や孤独を感じる一因は、この感覚にあるのかもしれません。誰かの妻でもママでもない、内なる本当のあなたを認めてくれる人が、身近にいてくれますように。がんばる「千尋たち」に、エールを。

【このコラムを書いている人】

すがわら さやか
菅原 明香 (あかるさかおる)

アライアンス
ナリワイ ALLIANCE 代表

通訳ガイドやアート活動、コミュニティづくりなどを行う複業アーティスト。三川町在住、2児の母。

